

【取扱い厳重注意】

平成24年3月9日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 齊藤修啓

平成24年2月13日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

海江田万里 元経済産業大臣

2 聴取日時

平成24年2月13日午前10時00分から同日午後0時00分まで

3 聴取場所

衆議院第一議員会館 財務金融委員長室

4 聴取者

高野利雄 委員

小川新二 事務局長

高嶋智光 参事官

飯崎準 参事官補佐

岡田幸大 参事官補佐

三田浩平 主査

齊藤修啓

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

特になし

以上

【取扱い厳重注意】

○質問者 よろしくお願ひいたします。

前回お聞きした質問の中で積み残しのものが幾つか、大きな項目の中で積み残しがございまして、簡単に御質問させていただければと思うのですけれども、1つは、質問事項の中で1の(3)の一番下にロードマップの策定と、これをつくられたいきさつについて簡単にですね。

○海江田元大臣 これは、その事故が発生しましてから、17、18、19日ぐらいから水が入って、それで何とかその場対応ですけれども、ある程度一方的に押しまくられるのではなくて、少し押し返してやるような状況が続きまして、それが10日ぐらい続きましたかね。途中からキリンという上から放水するものが入ったりしまして、少しここいらで全体的な流れを考えなければいけないのではないだろうかとは考えておまして、これは実際の話なのですが、ちょうどいろいろと各紙の新聞なんかも読んでいまして、こういう新聞記事を私が自分で見つけたわけです。31日ですけれども、日経と産経ですかね。これを見まして、私は少し全体的なロードマップをつくらなければいけないのではないだろうかと思ったわけです。

それで、実はこれはまだどなたにもお示しをしていませんが、ちょうどこの秘書官がいますが、彼に、最初に私がノートにこういう形でと言ってこれを参考にしたものを出しまして、彼が、4月1日にこういうものを最初につくったのです。これが一応マップの最初なのです。それで、毎日のように2人でいろいろやって、それでこういうね、これが最初のときの、まだどこにも出ていないと思うのですが。

これで、あれはいつだったかな、総理のところへ持って行ったのですよ。そうしましたら、余り評判はよくなかったのですね。そんなものをつくってできなかったらどうするのだというような話で、何回かやりとりしたのですが、最初はなかなか理解してもらえなかったもので、それで、これは我が方で作ったものですが、これを東京電力の、当時は、一番技術がわかる方が武藤さんです。だから、彼に投げて、とにかくこういうものをつくりたいからつくってくれということを言いましたら、向こうはそれこそ専門家ですから、こちらは素人ですから、ほぼ連日のようにいろいろつくってくれた。だから、4月上旬から、毎日東京電力で会議が終わりますと、全体会議が夕方7時ぐらいから始まりますから、1時間ぐらいたって8時過ぎから、武藤さん中心に技術者が入って、それで練り合わせをしまして、ある程度のものができたところでもう一回総理のところへ持っていきましたら、それはかなりできていますので、では、わかったという話になって、それなら、ひとつ総理の方から東京電力に指示をしてくださいとあって、それが、総理の指示がおりたのが12日だったと思います。

それで、でき上がったのは17日ですから、わずか5日でできたということになって、それで、やっつけ仕事ではないかとかいろいろなことを言う人はありました。かなり批判されました。けれども、そこは黙っていましたが、たった5日であんなものができるはずもないので、それはこういうもので、これも随分いろいろこちらアイデアを出

【取扱い厳重注意】

るな意味で問題になっていますけれども、最初のときから、ここにこういうあれは入っているのですよ。言葉としては、冷却をしていくというあれはね。やり方は途中で変わったわけですが、冷温停止状態ということがね。最初から「冷温停止状態」と書いたはずなのですね。「冷温停止」という言葉は使っていない。

○質問者 「状態」ですね。

○海江田元大臣 そうそう。「冷温停止状態」「中期的安定状態の達成」と。では、これを一つのめどにしようということで。

○質問者 わかりました。

○質問者 この4月17日という日付ですけれども、これは、この4月17日までに作成されたというのは、何かきっかけというのがあるのでしょうか。

○海江田元大臣 ですから、事態をずっと見ていましたから、事態の進展の中で、やはり次にやることは何なのかと考えていて、その結末に、ちょうど31日からスタートしたわけですが、それに加わり調整が必要でしたね。それから、これは事前に漏れるといろいろな意味でリアクションが来ますから、申し訳ないけれども保秘してくれということは、その会議の参加者に言っていましたので、東京電力の中でもそういうことをやっている、最初は余りわかっていなかったわけですね。ただ、現場とはいろいろやっていたはずですが、

だから、その前の12日ぐらいのところに入って、ちょうどひと月ですが、それは余り頭の中になかったですね。大体こういう形で外に見せられるようなものができ上がってきましたから、いいのではないのと言って。ただ、本当に随分細かな文言だったか何だったか、手直しをやって、それに、やはり更に1週間ぐらいかかって、それで17日は何かあったのかな、17日の意味というのは。

そうかそうか、18日に参議院の予算委員会があったのだな。だから、これを一つの見通しを発表する、国会の場で説明するという意味で17日までということだったのですね。

○質問者 その予算委員会の始まるまでには間に合わせてほしいというのは、総理の方から。

○海江田元大臣 いえいえ、全然、総理は別に何も言っていなかったですね。だから、最初に言って、後はこちらですとずっとやっていて、それである程度、これならいいだろうということで持って行って、少し詳しく説明して、そうしたら、それでわかったということで、では、そっちから言ってくださいと言って、それで、それを受けてやらせた形をとって、それでちょうど17日に発表したということですね。

○質問者 17日には、改めて完成バージョンを総理の方には説明された上で、発表されたということで。

○海江田元大臣 勿論。

○質問者 この工程表の作業は、統合本部のある2階の廊下の向かいの部屋で主に作業をされていたとお聞きしていますけれども。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 はい、やりました。全部そこです。

○質問者 わかりました。

それから、せっかく工程の話ですので、ちょっと質問事項からは順番どおりではないのですけれども、一番後ろに低濃度汚染水の海洋放出関係の話がございまして、これが濃度が低い、これを出したのがちょうど4月4日で、そうしますと、この作業をまさにやっていらっしゃるところで、この工程表の中にも滞留水の処理というものが中期的安定状態の達成の記載がされているところなのですけれども、ちょうどこのあたりの問題意識というのは重なっていた、これも何とかしなくてはいけないなという。

○海江田元大臣 海水に放出する云々という話は、この4月4日が初めてなのですが、ただ、そこへ至る過程では、本当に連日、特に一番あれだったのが4月1日ぐらいからですか、例の高濃度の汚染水。

○質問者 2日ですね。

○海江田元大臣 4月2日ですね、土曜日。これが、かなり高濃度の汚染水が海水に流れているということで、東電の対策本部でその映像を見て、とにかくそれをとめなければいけないというのが、まず先にあったわけですよ。それで、それをとめるためにおがくずを入れたり、いろいろなことをやっただけでも、なかなかとまらなかったと。だけれども、やっとならぬ4月の何日ですか、3日。

○質問者 とまったのは結構遅かったですね。

○質問者 6日ですね。

○海江田元大臣 6日だな、そうそう。片一方でこれを行っている、これをとめなければいかんという話と、それからやはり、どんどん水を大量に放水していますから、その水がたまる、この処理をどうするかという話で、その処理をするためには、それは、そんな水を海に流すわけにはいきませんから、どこかの建屋を使って、そして、そこに入れなければいけないという話になって、それで、いろいろな建屋の水の残量とか何かと、それから、その水はどこから来た水なのかとかということ調べていたら、集中ラドというところですか、やはりそこにを入れるのがいいと。水密性のこともあって、ほかに漏れてはいけないですから。その話があって、だけれども、その水もどんどんいっぱいになっていくから、これをどうしても出さなければいけないというのが4月4日ですね。

4月4日になって、朝9時からの全体会議があって、それで、片一方では、まだ2号機のピッチから水が流れていますから、これをどうやってとったらいいかとかという話をし、それが終わった後、9時半から全体会議の前の官邸連絡室というところで集まりまして、このときは、清水社長はこのころずっと休んでいたのかな、政府側からは私と細野補佐官、それから、安井さん、五十嵐さんか、それで、東電側からは会長、武藤副社長、西沢常務、武黒さんと、東電側はこれが大体いつも主な人たちですけれども、この人たちが入って、その説明を受けたと。

これですね、集中廃棄物処理施設、集中ラド、それから、5号、6号機のサブドレン

【取扱い厳重注意】

ピットにたまった水ですね。これは汚染度は低いのだと。今、片一方で海に流れている高濃度と比べると600万分の1だ、海水の方が600万倍だという話を聞いて、では、それについては万やむを得ないねという話になったのです。ただ、どういう文章にするかとか何とかいいうことは、もっとよくきちんとやらなければだめよということ。それから、福島県や双葉町への連絡を怠らないことということ。それから、モニタリングをしっかりとやるようにということですね。そのようなことを幾つか注文を出して、それでOKしたということですね。

○質問者 この日、午後3時ごろまでに総理まで決裁を得ているようなのですけれども、今ちょっと説明いただいた9時半の官邸連絡室での説明の際に、今、話にありました双葉町にはきちんと説明しておこうとか、あるいはモニタリングをしっかりとやるようにという話は、朝の9時半の会議の中ですべてを言ったのですか。

○海江田元大臣 これは、私はそうですね。このノートにありますから、9時半の段階で書いていますから、9時半からの段階ですから、そうですね。

○質問者 それで、この後、東電の中で環境評価に係る文書を作成する作業にかかっているようなのですけれども、今まで我々がヒアリングでいろいろ聞いてきているところによりますと、午後になって、1時ごろでしたかに、一度、海江田大臣の決裁がありまして、そこで、もう少しこの評価をきちんとやった方がいいという話があったということですが、それは御記憶ございますか。

○海江田元大臣 だから、正直に言って、最初に出してきた文書もかなりもう荒っぽいものでしたから、そこで東電の文書、保安院の文書に、「赤入れ」と書いていますけれども、かなり直して、もっとしっかり、これは初めて出すことですし、海中に初めて放出をすることですし、それから、まさに片一方で600万倍の濃度の水が流れて、まだこの段階では完全にとまるということがわかっていなかった段階ですから、そこは万やむを得ないものであるということを十分説明するということと、それからあと、先ほどお話ししたモニタリングの件とか、そういうことはしっかりとやらなければいけない。

それから、その水がほかのところ、あれはこういうプールみたいになっているところのその外に出すという話なのですね。だから、それはこちらのほうに戻って来ないようにとか、そういうような処置をしっかりとやるということは言いました。

○質問者 更に、集中ラドウエストの方に移した水が、また逆に、せっかく移したのに戻ってこないようにと。

○海江田元大臣 そうそう。

○質問者 環境評価の計算といたしますか、そこで何か、ちょっとこれは評価が甘いのではないかというような御指摘なんていうのをされた御記憶はございますか。

○海江田元大臣 それはちょっとありませんね。ただ、モニタリングのあれは、そんなにたくさんやっていなかったのですね。だから、やはりモニタリングはもっとしっかりとやらなければだめだということは言った覚えがありますね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それは今、委員長から御説明がありました、環境評価的には非常にレベルが低いものなので、我々も今、在京のいろいろな大使館に行ったりしまして評価についていろいろお聞きしているのですけれども、説明を受けた後は、確かにやむを得ない事情だということによくわかるという話を聞いていまして、我々もそうだろうなどは考えているところなのですけれども、ただ、大使館の方は、もうちょっと早く教えてくれよという話があるいろいろありましてね。

当時、政府内で、あるいは統合本部、東京電力が入っている中で、これは、漁協とか、周辺国とか、そこら辺にもきちんと事前に説明しておいた方がいいねなどという話が出なかったのですか。

○海江田元大臣 正直言って、私の頭の中に周辺諸国という頭はなかったです、これは。だから、ここに、福島県や双葉町という地元の人たちという頭はありました。

ただ、統合本部には外務省のロジも来ていますので、ずっと外務省いましたので、そういう意味では連絡が行くということにはわかっていました。ただ、それが最終的に2分か3分遅れたのでしょう。真珠湾攻撃になってしまったのだね、これはね。たしか5分ぐらいか何分かね。それはもう残念なことで、もう少し早くやっておいてくれればよかったなと思いますね。

○質問者 そうするのは、我々役人が、むしろもう少し気を回さなければいけないところなので、残念かなとは思いますが、わかりました。

それから、ちょっと話がさかのぼりますが、この地下に汚染水があるということ自体が判明したのが、3月24日に電源ケーブルを地下に引こうとした作業員が見つけた、こういう流れの中で見つかるのですが、そのころから汚染水を何とかしなければいけないねという話があって、細野大臣が中心になって、部会が中心になって話を進められていたようですけれども、この部会自体には委員長は。

○海江田元大臣 私は出ていません、それは。

○質問者 報告を聞いていたということになるわけですね。

○海江田元大臣 聞いていたということです。

○質問者 済みません、今の周辺諸国の話なのですが、委員長のところでいろいろなことに目配りされて、福島、双葉町まで言われて、確かに外務省がいればそうかもしれませんけれども、当時の大臣の御判断としても、「周辺諸国をきちんとやっておけよ」と言ってもよかったかなと。もし言われなかったとすると、どんな意識でおられたのでしょうか。この周辺諸国の問題というのは。

○海江田元大臣 そこなのです。

○質問者 確かに、双葉町漁協は近いですね。

○海江田元大臣 だから、太平洋側ですからね。これが日本海ならすぐ、当然のことながら韓国とか、中国とかに思い至るのですけれども、やはり太平洋ですからね。そうすると、強いて言えば、太平洋であれば、すぐ行けばアメリカですわな。ただ、距離は大分あるな

【取扱い厳重注意】

という思いがありましたから、やはり、申し訳ないけれども、本当に思いは至らなかったですね。

○質問者 わかりました。

○質問者 その放射性物質の放出につきましては、条約とか国際的な基準もあるようなのですけれども、その検討の過程では、事務方の方から、例えば国際法ではこうなっていますよとか、そういうことはなかったですかね。

○海江田元大臣 全くない。

○質問者 それで、先ほどの汚染水が見つかった時期にちょっとさかのぼった話で恐縮なのですが、3月末ぐらいから、やはりたまってきている水は集中ラドウエストに移すといった何か方法を、何らかの対策をとらなければいけないねということが検討されていたようでして、その中で1つのオプションとして、集中ラドウエストにたまっている水を海に流すということも考えなくてはいけないねという話が出ているようなのですが、これについては、委員長は。

○海江田元大臣 私の記憶と、それからノートを見てもわかりますけれども、1つのあれがバージ船なのですね。だから、まず流す前にとにかく貯蔵しなければいかんと。その貯蔵に何があるかということで随分いろいろな考え方をその前からやっていて、まさに3月の末ぐらいからやっていて、それで、とにかくアメリカにお願いをしてバージ船を持ってこようという話が出ていたのですよ。

これが、3月25日にバージ船が横須賀を出ているわけで、ずっと私は、そのバージ船が早く届かないかなと。ただ、あのときは水があれしたりして、バージ船が届いたのが、今の話で行くと3月27日、これは晴れていまして、朝の全体会議で、本日13時ごろ小名浜入港予定ということですから、バージ船にまず持って行こうということをずっと考えていまして、放水ということは私の頭の中にはありませんでしたね。

○質問者 4月1日の段階で海洋放出という話が一旦出て、でもそれは、その部会の中で、あり得ないという説明を細野大臣がされたといういきさつがあるのですけれども。

○海江田元大臣 確かに、この日の夜の8時からの全体会議の中で滞留水の、これは共用のかな、そこの建屋の1万6,000トンと4号機のタービン建屋に持っていく、ここは約8,000トン入るといふような発言はありましたね。

○質問者 それは4月1日になってですね。

○海江田元大臣 4月1日ですね。4月1日の夜8時からの全体会議で。

そうですね、大体そんな感じですね。そう、3月31日にバージ船がついたのだよな。15時45分着岸。

とにかく、私の中ではバージ船ということがずっとあって、そのバージ船でやってくれるのかなという話でしたね。ただ、それがなかなかやはりうまくいかない。それで、この記録を見ると、4月4日からやはり海水にというような話になっていますね。

○質問者 その4月1日に、部会の方でなのですかね。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 部会というのはどこ。

○質問者 特別プロジェクトチーム。

○質問者 委員長が出席されていない部会の中で、細野大臣が出席されている汚染水の処理をどうするかという検討会議のことなのですけれども、その中で、4月1日に一度、タービン建屋にある汚染水を海洋に出そうかという案が検討されて、いやそれはだめだ、あり得ないということを細野大臣が話されたといういきさつがありまして、その事前に、委員長のところに細野大臣からこういう話があるのだよというときに、それはあり得ないだろうというような話をされた記憶はございますか。

○海江田元大臣 私も、とにかく海水に流すことがあってはいけないという思いはずっと、海中に放出なんかしてはいけないということはずっと思っていましたから、当然そういうことを聞かれば、そういうことは言うだろうなど。言ったという記憶はありませんけれども、合意の中では、とにかく中にとどめておくということ。中にとどめておくことができなければ、バージ船でアメリカにお願いをしてやってもらうという認識でしたからね。だから、直接言った覚えは正直言ってありません、これは。ただ、聞かれば、頭の中では、出したくはなかったですよ。

○質問者 バージ船という選択肢がまだ残っている中でということですね。

○海江田元大臣 ちょうど進行しているときですからね。

細野君も、恐らくバージ船のことは彼が一生懸命やってくれていたから、同じ思いだったと思いますよ。

○質問者 わかりました。

汚染水の話はその程度で終わりました、質問事項で1の(4)に戻りまして、SPEEDIの関係ですが、事故対応の中でSPEEDIについて、こんなものがあって、こんなものが避難に使えるとか、そういう話というのは。

○海江田元大臣 全く、全くない。

○質問者 全くないですか。SPEEDIという言葉が記憶の中に出てくるのはどのぐらいの段階でしょうか。

○海江田元大臣 国会で随分言われましたね。だから、あのころですね。

○質問者 ずっと後。

3月23日に、もう事故から10日以上たっていますけれども、その段階で原子力安全委員会が、SPEEDIの本来の使い方というのはちょっとできない状態になっていたのですが、それでも何とか使いようがないだろうかということで、逆推定というようなことをやって、それを官邸に持ってきて説明されたということが明らかになります。それには委員長は。

○海江田元大臣 いなかったはずですね。入っていなかったですね。

○質問者 わかりました。

それから、その次の原子力被災者生活支援チーム、これは3月29日に立ち上げられて、委員長が事務長という立場にいらっしゃっているのですけれども、この立ち上げのいきさ

【取扱い厳重注意】

つと活動の概要を簡単にお聞かせ願えればと思います。

○海江田元大臣 とにかく政府とすれば、これは、避難の指示あるいは屋内退避の指示を出しているわけですよ。それで、その人たちの数も膨大だと。しかも、その避難の指示を出した時間ですとかそういうものが、夜中であつたり、それこそ本当に着の身着のまま出てきているということはわかっていましたから、やはり、この着の身着のままの人たちを何とかしなければいけないということで、それで、いわゆる被災者生活支援チームと。それからあと、避難している人たちも大変厳しい状況にあるという報告は受けていましたので、やはりその人たちのところに支援物資をしっかりと届けるとか、それからあと、まだここでは賠償金ではありませんけれども、義援金がどんどん集まり始めていましたので、そういうものを配らなければいけない。とにかく非常に全く困っているという状況でしたから、何とかしなければいけないということで立ち上げたわけです。

○質問者 それは委員長が発案されたのでしょうか。

○海江田元大臣 発案かどうかわかりませんが、とにかく、やはりこの人たちを何とかしなければいけないという思いはずっとありましたから、その指示をして、そういう形になったのだらうと思いますけれどもね。

○質問者 これは総理の方にも話をしたわけですね。

○海江田元大臣 勿論、報告して。

○質問者 立ち上げが3月29日となっているのですけれども、立ち上げのための準備とかというのは、海江田大臣の方から指示された時期が大体いつごろだったかとかという御記憶はございますでしょうか。

○海江田元大臣 だから、やはり1週間ぐらいしたところからいろいろな声が出てきていたことは、私の耳にも届いていたのですね。だから、とにかく18、19、20日ぐらいまでの間は、先ほどお話ししましたけれども、とにかく炉の1、2、3、4号とそのあたりがこうでもない、ああでもないという話で頭がいっぱいでしたから、そこから少しいろいろなことを考えなければいけないという余裕が出てきて、その中で、避難を余儀なくされている人たちのことを何とかしなければいけないという思いが出てきたのですね。だから、恐らく20日過ぎだらうと思いますよ。20日ぐらいまで本当に、とにかく。

○質問者 先ほどのSPEEDIなのですからけれども、3月から4月にかけて、情報を公開するかどうかとか、国民に説明するかどうかというのが一つの課題になってくるのですけれども、SPEEDIの情報とかを公表するかどうかについては、何か委員長の方で関わったりとか、御指示されたりとかということはございますでしょうか。

○海江田元大臣 いや、していませんね。

○質問者 済みません、あと1点お願いしたいのですけれども、3の避難関係で、前回いろいろと御説明いただいたのですけれども、最後、⑥の3月15日の11時に20キロから30キロの圏内に対して屋内退避というのが出されているのですけれども、この⑥の屋内退避指示について御記憶等ございますでしょうか。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 3月15日は、まだいろいろな事象が起きていた時点だね。

14日、19日。そうだ、この日は例の、最初は2号機の爆発だと思っていて、ところが4号機だったという事態の日だよな。だから、これは、やはりかなり爆発というか、このころは深刻が一番ピークだったときだよな。それぞれの炉の状況が。だから、そこからやはりこの話が出てきたのだと思うよ。

特に、15日の朝方だけれども、最初は第2だと言っていたのだけれども、それが、従来の水素爆発とは違うというような情報が1回出たわけだね。従来の水素爆発と違うということになると、これは炉の爆発というか炉の大規模な損傷だから、そうすると、大気中に飛散する放射性物質の量がけた違いに違ってくるわけだから、これはかなり大変なことだということですよ。

ちょうど6時ぐらいにその事象があつて、それで4号機のところからも煙が上がっている、それから、3号機からも、この日は火災になったのだね。火災発生で、それで、東電にいて、私の行動を見ると、官邸に行ったりして、そこで決めたのだらうと思うけれどもね。やはり、最初は2号機の話があつて、それから、今度は4号機で5階付近から何か大きな損傷があるとか、それで3号機からも火災発生ということで、いよいよこれはもう大変な事態になったなという思いだよ、これは。次から次だものね。

○質問者 このとき、これまではずっと域外への避難ということで、20キロ圏内の人は外に出てくださいというような避難だったのが、この日は屋内退避という指示になっているのですけれども、そのあたりの検討課程とか、どういう意見があつたのかとか、もし御記憶があればですね。

○海江田元大臣 基本的な分け方というのは、とりあえず最初は家から出てもらうことだけれども、これで避難が拡大すると、片一方で人数がどのぐらいいるかというデータもいつも見ていたわけだよな。そうするとそこで、その意味では、30キロ圏内を仮に避難かということにすると大変な混乱になるから、まず、やはり屋内に退避をしてもらって、そしてその後の様子を見ようという話ですね。

○質問者 その範囲内の人口の話ですとか、これを避難にすると大きな混乱が起こりますよというのは、事務方から何かそういう意見とかというのはあつたのでしょうか。

○海江田元大臣 そういうものは恐らく危機管理監だろうと思うけれども、私も当時はそういうのを見ていたけれども、何キロにどこの市があつて、人口が何人でと、こういうものが全部あつたからね。

○質問者 もし御記憶があればなのですけれども、このとき、保安院は保安院で、朝の8時半から9時ぐらいの間に、避難範囲を拡大すべきかどうか今、検討中なので、保安院としても考えをまとめるようにという指示があつたと。保安院で検討した結果、30キロまでの外への避難だとやはり混乱が生じるので、屋内退避ではどうかということでは海江田大臣の方にも報告をしたと聞いているのですけれども、そういう報告があつた覚えとかはございませんか。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 恐らくそうだろうね。今、私が言ったような話がある話だろうね。

○質問者 それに対してどうお答えされたかとかいうところまでは覚えていらっしゃいますか。

○海江田元大臣 それは、そういう判断でやむを得ないだろうということだと思う。

○質問者 今に関連しまして、海外の大使館と、特にアメリカなどと、避難範囲を30キロにするとか、そういう情報というのは逐一大臣のところに入ってきていたのでしょうか。それに対してどんな対応といたしますか、何かやっておられたのかあたりをお聞きしたいのですが。

○海江田元大臣 フランス大使館とかアメリカ大使館とかが、自国民に対して、日本に居留している人たちに対してそういう指示を出したというような話は、たしか60キロだったかな、そんなような話は聞いていました。それは独自に判断する話であって、それは人数も限られているわけですから、そういう判断はあるのだろうなという、その報告は、逐一ということではありませんけれども、一つの参考資料として入っていたことは確かです。

○質問者 その前提としての海外の大使館に対する日本政府からの情報の問題が、特にアメリカの人たちが困ったようだけれども、そういう情報提供との関係で、本来そんなに遠くまで行かなくても済むものを、彼らがどこの判断でやっているのか、当時はそのあたりの何か情報はお持ちだったのでしょうか。

○海江田元大臣 いや、特にそれはありませんでしたけれどもね。だけれども、どこの国でも、そういうことがあったとき、やはり自国民たちとか、国の人と外国の人が違うのは当たり前かなと僕は思いますけれどもね。

○質問者 わかりました。

○質問者 質問事項で言いますと2のところ、前回、若干既にお聞きしている部分もあるのですが、まだ漏れているところがありますので補充的にお聞かせ願えればと思うのですが、(1)の原災本部長、総理、原災本部長の権限が、マニュアル等によれば、基本的には現地対策本部長、今回で言いますと池田副大臣が行かれましたので、池田副大臣に委任して、現地対策本部でいろいろオペレーションをやるということをもととは想定していたようですが、この手続が途中でとまってしまっておりまして、最終的には告示というもので公にするのですが、その告示手続はとられていないということまでがわかっております。

なぜ途中でとまってしまったかというところは、まだ調査中なのですが、これについては、途中でといたしますか、事故が起きて1か月ぐらいの間に何か問題になったことをお聞きになったことがございますか。

○海江田元大臣 はっきり言いますと、私は、本当に現地対策本部長のことでは非常に悩んだとか苦労しましたね。いろいろな事情があったのでしょうけれども、ちょうど15日ぐらいに、週末ですけれども、15日は週末かな、何か副大臣が帰ってきて報告を受けたところまではいいのですが、そこからまたしばらくちょっとこちらにいたりし

【取扱い厳重注意】

たので、びっくりして、とにかく早く戻ってくれということを行いましたから。そうしたら、いろいろな事情があったようですけども、これは、もう少ししっかり腰を落ち着けてやってもらいたかったですね。

そういう問題がありましたから、それからあと、勿論物理的な、オフサイトセンターがだめになって、最初から全然使えなくて、その隣に入って、それから福島県の県庁の方に行きましたから、そこしか適当な場所がなかったということなのでしょうけれども、やはり福島の県庁からいろいろやるのも、こちらから指示を出すのも、そんなに変わりはないのかなと思ったりもしましたけれどもね。

勿論、もっと現対本部をしっかりしなければいけないということは、ずっと思っていましたね。

○質問者 何か具体的な事項で、もう少し現対本部が機能してくれればいいのかというように事柄と申しますか、どんなことでお感じになったのですか。

○海江田元大臣 やはり一番大切なのは避難の指示とかそういう話で、最初のところでは、現対本部長に電話をしてかなり細かく聞いていたわけですよ。これはまだ最初のころの避難でしたけれども、どこの病院に何人残っていると。最初はもう、全部いなくなったと言っていたのですけれども、実際には病院に人がいましたということなので、では、とにかくその人たちを全部移して、それからでなければこちらの現対本部の移転もだめだと言って、そのようにしてくれましたけれども。そういうきめ細かな情報というのはどうしても入ってこなくなりましたから、それは非常に困ったし、そういうことを現対本部がもっとしっかりやってくればよかったですかなと思っています。特に避難の問題ね。避難指示ね。

○質問者 官邸内、中央にいとそういった情報をなかなか把握できないでしょうから、現地の方がしっかり機能してくればということだと思うのですが、今から振り返ってみて、現地が十分機能してくれなかった原因と申しますか背景なり、現地の事情もいろいろあったと思うのですけれども、どの辺が不備だったのでしょうか。

○海江田元大臣 一つは、5キロというのが、これまでの経緯から、原子力の事故から決めたオフサイトセンターという話であって、ところが、やはり今回のような場合、それがだめになったとき、すぐに福島の県庁まで行かずに、本来だったら第二のそういう設備を当然備えておくべきであったし、そういうことが全くなかったわけですから、最初から第二が福島に決まっていたという話でも全然ないですし、やはり予備施設というか、そういうものを重層的にしておく必要があったかなと思っていますね。

○質問者 ちょっと福島では遠い。もう少し近いところに必要だという感覚ですか。

○海江田元大臣 だから、その後になって聞いた話ですけども、例えば南相馬の方とか、幾つかやはりそういうところも全くなかったわけではないので、そういうことの情報も全然入ってなかったですから。

もうあのときは、あそこがだめだったら福島ということは、本当は、先遣隊を出したわ

【取扱い厳重注意】

けですから、いろいろそこでリサーチしていたはずなのですが、何か、もうとにかく福島県庁のところということで。

最初聞いたときは、確かに福島県庁の方が人が集まりやすいかなと思ったのですが、やはりもう少し別のところでもよかったのかなど。勿論、安全性は確保しなければいけないけれども、できるだけ、まさに現地対策本部ですから、現地に近いところにそういうものは必要だなということは思いましたね。

○質問者 現地の対策本部の体制とか人員とか、そんな関係では、何かお気づきになったこととかはありますか。

○海江田元大臣 これは、福島県の方から内堀副知事なんかが一生懸命やってくれたとは聞いていますから、内堀さんとも随分直接電話でやり合ったりしまして、なかなかしつかりした人だなということがわかりましたから、そういう意味では、人的な構成とか、それはありませんでした。ただ、聞いてみると、なかなか環境面というか、福島の県庁の方に移ってからも、やはり食料の事情とか何とか、あれはかなり、私も行ってみたいけれども、ちょっと気の毒だなと思いましたね。

○質問者 ありがとうございます。

○質問者 移転の話が出だしたのは実際に移転する前日の14日からと聞いているのですけれども、委員長の認識としてもそれでよろしいでしょうか。

○海江田元大臣 はい、そういう話ですね。

○質問者 当初、14日に移転という話が出たときの委員長が感じたことと伺いますか、この移転はいいかだめかというレベルで言いますと、どういう感想を持たれたのでしょうか。

○海江田元大臣 とにかく全部、みんなが避難をしてからでなければ、そんな移転なんかできるはずもない話であって、それで、かなりそのところで、全部避難したのかということはかなり確認して、そして、先ほど言ったような、実は病院のところはまだ人がいて、今、警察に頼んでその人たちを運び出しているところだからというようなことを聞きましたから、それはもう、その人たちが出てからでなければだめだということは言いました。それは当然のことですから。

○質問者 その14日のうちに、現地本部長、すなわち池田副大臣と何か話をされたということはないですか。

○海江田元大臣 いや、かなりそのあたりは連絡で話はしました。

○質問者 電話で。

○海江田元大臣 はい、たしか電話で話をしました。

○質問者 翌朝は、電話で話をされて、それで。

○海江田元大臣 16日のときはね。

○質問者 はい。それで、移転については了解したと話したと聞いているのですけれども。

○海江田元大臣 それはそのとおりです。

【取扱い厳重注意】

○質問者 その事情の変化というのは、そうしますと、もう避難が。

○海江田元大臣 一つは終わったということと、それから、先ほどお話ししましたけれども、15日というのは非常に深刻な状況でしたから。それは、オフサイトセンターの隣の、オフサイトセンターだったところも決して、特に放射性物質に対する遮蔽性が確保されているわけではありませんから、やはりそれは、その意味ではやむを得ないだろうと思いました。

○質問者 そうすると、大きく分けると2つの理由、避難が終わったという報告があった、それから15日は朝。

○海江田元大臣 6時ごろのね。

○質問者 爆発があつたりして事態も非常に悪くなっているという、この2つが大きな理由になっているというところでしょうか。

○海江田元大臣 そうですね。

○質問者 避難が終わったというところなのですから、これは、その前の日、確かにまだ病院の入院患者で避難できていないところがありまして、15日の朝の段階でもまだ終了していないのですけれども、終わったという報告で、それで、では、もう移転はいいよと話をされたということになりますでしょうか。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 何時ごろのことかというのは記憶にございますか。

○海江田元大臣 何時ごろですかね。その6時ぐらいからの爆発音でかなり混乱していましたけれども、まあ午前中ですね。もう少しあれすると、9時か、10時か、11時か、大体その辺ですね。

○質問者 わかりました。

それから、ちょっと日はさかのぼるのですが、11日に震災と原発事故が発生いたしましたので、それで、12日には1号機の建屋が爆発、そして、13日には3号機がおかしな状態になっていく、こういう中で、13日に保安検査員に対して、1Fにいました保安検査員が、12日の朝に一旦オフサイトセンターのある検査事務所に戻ってきていたのですが、もう一度13日の朝に派遣するということになっておりまして、その派遣した理由については、海江田大臣から、海水注入の状況をきちんと保安院が監視せよという指示があったからだと聞いているところなのですから、これはそういう指示をされたと。

○海江田元大臣 そのとおりだと思いますよ。だって、あの海水注入についても、一応、やるのは事業者側だけれども、保安院がそれを認めて、当然いろいろな手順ができていくかといって、了承で判を押したわけですから、それがきちんとできているのかどうかチェックしなければ話にならないから、そんなのダメだと言って、きちんと確認しろという話しはしましたよ。

○質問者 今もう1Fに保安検査員が不在になっているという情報もお聞きになっていましたでしょうか。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 不在になっているかどうかわかりませんが、きちんと海水注入ができていのかどうかということの確認をしろという話ですから。不在になっているというのは、ちょっと聞いた覚えは余りない。それは、当然いると思うじゃないですか、それは普通は。

○質問者 そうですね。わかりました。

それから、先ほどちょっと話が出ました、松下副大臣への交代なのですけれども、これは、やはり皆さんかなり疲弊されている、本部長を含めて疲弊している、疲れていらっしやるということに対する配慮なのでしょうか。

○海江田元大臣 どう言えばいいのですか。とにかく池田さんだって、着の身着のまま飛び出したわけですから、その意味では、事態自体も長丁場になるから、とにかく一回帰ってきて報告してもらって、そして、その間、交代してと思ったわけですね。

○質問者 本部長の方からの申し出があって了解されたと。

○海江田元大臣 それはそうだと思います。こちらから帰ってこいとは言いませんけれどもね。それは、やはり御自分でいろいろ考えたところかもしれない。

○質問者 また4月から池田副大臣が現地対策本部、オフサイトセンターの方に行かれるわけですが、これは大臣の方からの指示で。

○海江田元大臣 ええ、それは早く行ってくれと。

○質問者 これは、ある意味、松下副大臣が本部長としても行かれて御活躍されているので、そのままでいいかなという点があるのですが、ここは何か理由が。

○海江田元大臣 だって、最初に任じたのは池田さんですから、それは、池田さんがメインで、ただ、万やむを得ないときは松下副大臣にかわってもらおうということでありましたから。それから、松下副大臣は、どちらかという、先ほどお話をした被災者の支援の方を、役割分担からいけば松下さんにやってもらおうというつもりはありましたから。

○質問者 なるほど。

○海江田元大臣 あれは二十何日かな。

○質問者 3月末ですね。29日かな。

○海江田元大臣 二十何日だったか。

○質問者 29日ですね。

○海江田元大臣 29日だな。ちょうどそれを松下副大臣が任命を帯びたので、池田さんは現地の現対本部ということで。

○質問者 たしか松下副大臣が事務局長という立場で生活支援チームに入られたということでしたね。

○海江田元大臣 そうです。

○質問者 それと交代という形ですか。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 それと、5月に入ってからでしたか、現地対策本部長の池田副大臣が体調を崩

【取扱い厳重注意】

されて、しばらく不在になってしまった時期がございましたけれども、あのときは、すぐにまたかわりを本部長に出すということは考えられなかったのですか。

○海江田元大臣 それは大分後になってきて。

○質問者 ええ。

○海江田元大臣 個人的なことになるけれども、どういうあれなのかというので、とにかく[REDACTED]のですけれども、どう言えばいいのですかね、特に、[REDACTED]のですからとにかくやっってくださいということでしたので、言ったのですよ。

○質問者 わかりました。

質問事項的には、次のページの4の方の広報関係で幾つかお聞きしたいテーマがあるのですが、大きなところで、この原発事故が発生した後に、政府として、政務にいらっしゃる総理初め皆さんの中で、これから広報に関してはこうやっていこうというような何かスタンスを決められたというようなことは、しっかり開示していこうというか、広報していこうというか、できるだけ情報を出していこうとか、そんな話をされたということはございますか。

○海江田元大臣 とにかく、最初から私は、別に隠し立てをする必要はないのだから、できるだけ開示をしようというつもりでございました。

それからあと、保安院にはかなり早い段階で、これは東京電力に対してもそうですけれども、資料は全部とにかく保全するよということには言っていました。別に何か都合の悪いことを隠そうなんて思いはさらさらなかったですから。ただ、言い方についてはいろいろ問題があるかと思えますから、その言い方は注意しなければいけないけれども、できるだけ事実在即した発表をしていこうということでありました。

ただ、私は、私自身が何か、毎日会見をやったりとかということはやる必要はないなど。とにかく、私の役割というのは、やはり物事を決めるのは、決裁しなければいけない役割ですから、勿論本部長がやらなければいけないことはありますけれども、炉周りのことはこちらがやりませんとできませんから、私はその意味では、とにかく物事を決めることに徹して、広報に回ろうとかは全然思いませんでした。

○質問者 今、お話いただいたような広報に関する、仮に広報する場合のスタンスと申しますが、そういうものについては、総理あるいは枝野官房長官との間で何か相談されたりとか、そういうことはしなかったのですか。

○海江田元大臣 一つひとつについてはありませんでしたけれども、私は、別に枝野さんも総理も、そんな隠し事をする人間ではないと思っていますから、その意味では考えていることは同じだと思っていましたから、あとは任せていました。

○質問者 わかりました。

既に中間報告の中でも若干触れさせていただいているのですけれども、3月12日に保安院の会見の中で、午前、午後、中村審議官が1号機の炉の状態について広報されたときに、

【取扱い厳重注意】

午前中は炉心が、燃料が溶けている可能性があるということをおっしゃって、午後は、もう少し更に進んで、ほぼ溶けているのではないだろうかというような言い方をされたときに、官邸の中で、その発言はどうかということであるという異論が、その発言の仕方というか広報の仕方と申しますか、それがどうかということであるという異論があったと聞いているのですが、ここはなかなかちょっと我々もよくわからないところで。

○海江田元大臣 私も、そのところはよくわからないのだね。ただ、保安院のああいう広報の体制とか、それから当直の体制だとかは、もう緊急事態が起きたらどういう形でやるかということで、たしかずっと決まっていますね。チームがあって、365日全部担当がいて、それがどういうローテーションでやっていくかということで決まっていたから、それにのっとった話だろうと僕は思っていましたけれどもね。

ただ、あの発言は問題だなというようなことを私が聞いて、その会議に加わったという記憶はないですね。

○質問者 例えば、確証もなしでああいう発言、広報をするのはけしからんとか、そういうような話をどなたかがされているのを聞いたとか、そういう話をしていたらいいねというのを聞いたとか、何かそういうものはございませんか。

○海江田元大臣 僕は、その後、根井さんがやって、根井さんの対応というのは、あれは、後で聞いてみると、カメラが回っているのを知らずに、何か非常にラフなあれをやって、僕はあのときは怒りましたよ、それは。あんなものではだめだ、絶対だめだと言って。そっちは覚えているのですけれども、非常にはっきり覚えています。中村さんについては、余り記憶がない。

○質問者 わかりました。

○質問者 今から考えますと、政府も、言われたようにきちんと広報していると思うのですけれども、国民はそうとっていないですね。何か全然政府も東電も信用していないと。何か根っこにそんなものがあると非常にやりにくくなったと思うのですけれども、それはどんなふうに思われますか。広報体制の在り方、大きな意味での在り方、あるいは、何でそんな話になっているのかというあたりのお気持ち、感想でも結構なのですが。

○海江田元大臣 確かに、広報というのは非常に大切なことですからね。起きていることを正確に伝える。それで、だけれども、必要以上に不安をあおってはいけない、そういう大きな原則で、あとはそのバランスですね。

ただ、自分は、先ほどもちょっとお話ししましたけれども、余り広報の方で何かやろうということは、この時点では思っていなかったのです。とにかく、目の前で起きていることに判断していかなければいけないので、あとは、官邸周りでは官房長官がやってくれる、こちら側では保安院が技術的なことについてはやってくれるということでしたから。

余り広報について、その意味では、確かに大事なことなのですが、このときに、広報が大事だから広報をしっかりやらなければいけないというようなことが自分の気持ちの中でどのぐらいあったかと言ったら、申し訳ないけれども、かなり小さかったのではないかな。

【取扱い厳重注意】

○質問者 主に枝野官房長官がやっておられて、そちらで押さえてという感じでしょうかね。

○海江田元大臣 ええ。

○質問者 炉心溶融の会見の話なのですけれども、中村審議官がそういった会見で発言される。その段階では、もう大臣のところにもそういった炉心溶融の可能性が有りますとか、同じような情報はもう既に入っているという感じだったのか、それとも、その会見とかでの発言を聞いて、そうなのかと認識されるような感じだったのかというのは、どんな感じですか。

○海江田元大臣 炉心溶融という言葉かどうか、後でいろいろ言葉の整理をもうちょっと後になってやりますけれども、どうなのだろう、メルトダウンという言葉はよく聞いたけれども、その定義自体が非常にあいまいなというか、文学的と言ってはいけないのかもしれないけれども、チャイナシンドロームとか、何かそういう言葉と結びつけられる言葉だなと思っていましたね。

いろいろな意味で炉の状況がどういう状況なのかということは聞いていましたから、それこそ、まず燃料ペレットがだんだん溶融して行って、するとそこは圧力容器というのが、格納容器の中にいろいろな棒がたくさん入っているから、そこを伝わって下に落ちて行って、勿論圧力容器の中にも残っているけれども、それがこういう砂粒のような状況か砂利のような状況なのか、だけれども中はまだ冷えていないから、周りにかさぶたみたいなものができて、こういうふうに落ちているみたいな説明というのは受けていましたから、そういう状況だと思っていましたね。

炉心の損傷度が何%とか、それは大分後になって、東京電力がいろいろな試算をやって、炉心のうちの何%というような話で。だけれども、あれも、聞いてみると、1,000本あれば、その1,000本のうち何らかの形で破損しているのは何%だとか、そういう話とか、そういう細かな説明は後で受けましたけれどもね。

○質問者 そうすると、炉心溶融の可能性があるかどうかというざくっとした話よりも、もう少し具体的な話というのは、御説明を受けていましたということでしょうかね。

○海江田元大臣 そうですね。

○質問者 それから、メルトダウンという言葉については、そういったイメージなり、ちょっとあいまいだとか、チャイナシンドロームにつながるようなイメージもあるということもあって、やはり表現としては余り厳密ではないというか。

○海江田元大臣 それは、後のところでかなり、それは国会でも随分議論になりましたからね。だから、そういうことを聞いて、もう少し言葉を整理しようではないかということを経済院と保安院とに言って、それで日付は、だからその後の方だろうと思うけれども、根井さんは英語なんか堪能だから、「メルトダウン」という言葉はどうなんだ、一般的に使われるのかということを知ったら、いや、「コアメルト」という言葉は彼から聞きました。一番正確な表現は「コアメルト」でないかと。では、コアメルトというのは日本語

【取扱い厳重注意】

に直すとどうなのか、炉心損傷とか炉心溶融か。それで「炉心溶融」という言葉ではないかというので、それがいいのではないのと言って話をしました。

○質問者 それから、3月12日ごろの段階で、官邸の中での意見というか感想なのですから、保安院からの情報が遅くて、結局、会見で保安院が言っていることについて、きちんと事前に官邸にも入れてくれよとか、情報が先に来ていないではないかみたいな話なり不満なりというのは、何かございますでしょうか。

○海江田元大臣 そのところも、結局、私のところには保安院の人がいつもついていましたから、そこから必要に応じて情報を聞いていたわけですから、それが、では、例えば官房長官のところへ届いたかどうかというのは、それはちょっとわかりません。だから、そういう意味では、官房長官なんかがそういう意識を持ったというのは理解はできませんね。

○質問者 ちょっと今お話が出ました言葉の整理として、4月10日ごろから、委員長の御指示で、保安院で炉心に関する用語を、きちんと整理しなさいとこういう御指示があったという、これはそれで間違いないですか。

○海江田元大臣 はい、間違いないです。

○質問者 この4月10日ごろにこういう御指示をされたきっかけといいますか理由といいますか、このタイミングで何かあったのでしょうか。

○海江田元大臣 4月のその数日前だったと思うけれども、衆議院の予算委員会でもかなり議論があったのですよ。それを聞いていて、やはりこれはきちんとした、ある程度科学的なとか、言葉を整理して、それはこちらが答弁するときなんかには、やはりそういうきちんとした言葉で情報発信した方がいいのではないのということで、保安院と東京電力とに指示をして、そしてまとめたものがあるのですね。この日付が4月6日か、経済産業委員会か、予算委員会ではないか。そう、4月6日、衆議院の経済産業委員会だ。

かなり細かく聞かれたのですよ。これは、寺坂さんもそこで話していたのですけれども、梶山さんが、「保安院に伺います。メルトダウンの定義というのはどういうことでしょうか。定義というのはどういう意味でしょうか」とかというときに、寺坂さんが、「ただ確たる定義あるものではございません」と一番最後に答えている。そこで聞いていて、それはないだろうと思ったので、これはやはりきちんとした定義をしなければいけないなど。

○質問者 わかりました。

それで、最終的には4月18日にペーパーがまとまっているようなのですけれども、そのペーパーが今ここにあります。

○海江田元大臣 これは、保安院が安全委員会に出したのですね。

○質問者 安全委員会にもこの4月18日に説明に行っているようですけれども、これは、先ほどの4月10日の委員長の御指示で作成されてまとまったものということで間違いないわけですか。

○海江田元大臣 そうです。

【取扱い嚴重注意】

○質問者 それで、この中で「燃料ペレットの溶融」という言葉が出てきて、その燃料ペレットの溶融というのとメルトダウンというのが区別されているようですけれども、こちら辺についてはどんな議論をされたのか、何か御記憶にあることがありましたら。

○海江田元大臣 勿論、炉の中の情報というのはなかなかとりにくい状況にあるけれども、周辺の状況とか、線量とかいろいろなことを勘案して、確実なものはどれかという話で、もうはっきりしているのはどれかということで、この燃料ペレットの溶融は、もうこれは確実ですということですね。では、その確実な言葉をまず使おうということですね。

○質問者 燃料ペレットの溶融という言葉というのは、どなたが最初に発明されたというのか、考案されたというのか。

○海江田元大臣 いや、それはわかりません。

○質問者 それはあれですか。

○海江田元大臣 はい。それは専門家がきちんと。

○質問者 委員長がお聞きになったのは。

○海江田元大臣 保安院から説明を。

○質問者 保安院ですか。それは、細かい話で恐縮なのですが、東電の統合対策本部か、あるいは東電の中で、何か打ち合わせをしているとき。

○海江田元大臣 東電の話も聞きましたけれども、最終的にこの紙をどこで見せられたかというのはちょっと記憶にないですね。こういう形で整理して出すということですね。

○質問者 燃料ペレットの溶融という定義の説明の仕方については、ああ、これいいのではないのというような積極的な評価をされた御記憶というのはございますか。

○海江田元大臣 だけれども、それは、燃料ペレットが溶融していることは事実ですから、その溶融した燃料がどこに行くかといえば、先ほども言いましたけれども、上に行くはずはないので下に行くわけです。ところが、その下に行っている状況というのが、どういう状況で下に行っているかはわからないので、圧力容器があって、格納容器があって、特に格納容器の下のところにはコンクリートで固めた、しかも岩盤の上に、何か、最終的には石を磨くのだそうですね。そういうこともやってやっているから、この下に恐らくこういう粒々になっているのではないですかとか、いろいろな説明は、いつごろかな、聞いてあるんですね。その時々には説明は聞いて、では、こういうことなのだなとかというものをいろいろ絵に描いたりして、自分なりに理解はしていたのですがね。

それは何日ぐらい。そういうものも見せてもらいましたかね。そうそう。こういうものがあるのだ。

そうだね、溶融した燃料ペレット、溶融井戸。もっと絵に描いて、こうやって、こうやって、この下にこう落ちていると。私の理解では、恐らくそういうものが下に落ちて、固まりは大きなものや小さなもの、いろいろあるだろうけれども、その中にあるのだと。それで、水がかかっているから周りは冷えてきたけれども、中はまだ半熟卵みたいになっ

【取扱い厳重注意】

ているという説明で、ああ、そういうものなのだろうなと思いましたね。

○質問者 最終的なこの保安院の整理ペーパーは、委員長としては、かなりきちんと説明が整理できたなという感想でしたでしょうか。

○海江田元大臣 まあ、思いましたね。

○質問者 先ほどコアメルトの話がされていたのですけれども、4月10日ごろに、官邸の控室の中で東京電力の方が海江田大臣等に炉心の定義の話についてお話されたとお伺いしているのですけれども、「コアメルト」を直訳すると「炉心溶融」にまさになると思うのですけれども、なぜ「炉心溶融」という言葉をお使いにならなかったとっていらっしやいますか。

○海江田元大臣 4月10日。

○質問者 ペーパーがあるでしょう。

○質問者 こちらは、実際に海江田大臣がごらんになられたかわからないですけれども。

○質問者 この4月10日の段階では、まだ。

○海江田元大臣 炉心溶融が燃料ペレットに何で変わったのか、そこはちょっとわからないな。こういうところは後から書いているのだな。これに書いてあるのは、何かあれなのだよな。

だから、これが何で言葉が変わったかという話ね。東京電力、炉心溶融が。これは東京電力がつくったものだね。

○質問者 そちらは保安院がつくったものです。

○海江田元大臣 保安院がつくったの。

○質問者 これの最初のドラフトということですね。

○質問者 最初のバージョンです。

○海江田元大臣 ドラフトなの。それが18日になったらこちらに変わっているというの。

○質問者 はい。

○質問者 その日じゅうに、同じ4月10日のときに、もう既につくり変えているのですけれども、これが夜の段階の話だと保安院からは話をお伺いしているのですけれどもね。

○質問者 何か議論があったのかなと。

○質問者 東電の統合対策本部の中です。

○質問者 何か御記憶にありましたら。

○海江田元大臣 ちょっと記憶にない。「炉心溶融」が「燃料ペレットの溶融」になっているのだな。

○質問者 「炉心溶融って、ちょっとセンセーショナルじゃない？」とか、そういうような話があったのでしょうか。

○海江田元大臣 いや、それは覚えていない。燃料ペレットが溶融し、燃料集合体の形状が維持されない、これはいいのだ。これは燃料ペレットの溶融だろう。こちらは10日になっているのだな。

【取扱い厳重注意】

同じなものな、炉心溶融と燃料ペレットの溶融。これは本当にちょっと記憶にないな。

○質問者 それと、質問事項の4の(3)になりますが、INESレベル7の公表、これは、保安院の担当官が評価担当官ということになっているようですけれども、これはいろいろ、発表が遅かったのではないかと言われてたりもしているところなのですけれども、これについての委員長としての当時の。

○海江田元大臣 私は、これは11日に聞いたのか。たしか1日前ぐらいだね。

○質問者 そうですね。

○海江田元大臣 その前の日か、前の前の日か、とにかく早くこんなのは発表しようと思った。ただ、総理のあれが要るから。だから、11日は、とにかく1か月の記念の日で、何かすごい日程が立て込んでいて、総理に対する説明の時間がとれなかったのかな。たしかそうなのです。それからあと、この日はかなり大きな余震もあったのだよ。それで結局、翌日の朝か何かに僕が官邸に行って説明をして、それでOKということになったわけだよな。

だから、僕は説明を聞いて、この4月11日の夜、説明を福山官房副長官に、これは僕がやったのだな。それを秘書官に言っているのだ。

○質問者 いや、たしか大臣がされたと。

○海江田元大臣 これは僕じゃないな。これか。だから、12日の閣議が終わってから説明をしたのだな。

○質問者 閣議後の説明のときには、一緒に深野対策監と。

○海江田元大臣 行っているはずだよ。

○質問者 あと、原子力安全委員会に入られた広瀬参与と一緒に入られたということ。

○海江田元大臣 そうそう。

○質問者 そうですね。わかりました。

そうすると、この4月の発表の直前に、委員長は初めて、これらについてはこういう発表をしますということを知られた。

○海江田元大臣 そうだね、これはね。

○質問者 それ以前、もっと早く発表しろとか、そういうような話は。

○海江田元大臣 とにかく11日だよな。

だから、そうか、10日の夜の段階で、日曜日だったけれども、これは保安院から評価の引き上げについて説明を受けて、それで私から、官邸に説明の上、公表するよう指示をしたわけですよ。そう、だから、やはりこれは10日の夜なのだよ。

それで、ところが、11日がいろいろな事情があったのでなかなか説明ができなくて、総理秘書官に、これは原子力保安院より評価の引き上げについて説明はしているのだね、4時ごろにね。

○質問者 11日ですね。

○海江田元大臣 はい、11日の4時半ごろね、秘書官に。これは保安院の人間がやって

【取扱い嚴重注意】

いるので、僕がやったわけではないのだ。

それで、僕は、とにかく明日の朝、閣議があるから、閣議後、行ってもらえそうだから、ここで明日の朝、説明しようということだったのだね。

○質問者 わかりました。

○質問者 4月10日の保安院からの説明をお聞きされたときに、委員長は、もうちょっと早くできたのではないかとか、そういった評価的なことというのは何かお考えになりましたか。

○海江田元大臣 それは保安院に対して。

○質問者 それもそうですし、東電にも。

○海江田元大臣 それは、もう7のレベルになっているならば、早くそれは公表すればいいと。ただ、これは、それまでの5のときも、ずっと総理と相談して、全体的に発表していた話だから、総理から統一的に発表していた話だから、それは総理なり官房長官から発表してもらおうということだったね。今まで僕が、今幾つになったなんていうことを発表したことはなかったからね。だから、その理解をもらうために、14日が、もう少し早くわからなかったかと。それは、どうなのだろうな。5から7にどのぐらいの時間があるの、あれは、発表の日には。

○質問者 半月ぐらいですね。3月の半ばにですね。

○海江田元大臣 半月ぐらいあったの。それで言うと少し遅いな。もっと早く、時間的に。だって、炉の事象というのは、先ほど言ったように、15日ぐらいが一番危機的な状況にあったわけだからね。

○質問者 我々の問題視からすると、何日間かかかったということもあるのですけれども、10日に初めて計算結果が出てきたわけではなくて、何日か前に保安院の中でこんな感じかなという計算はしていて、ただ、まだ十分自信がないと言うと変ですけれども、まだ安全委員会の方も見解を出していないということもあるので、ちょっとそれだけ何日かためらった上で、安全委員会がまとまりそうだという同じタイミングで発表することにしたという経緯らしいのですね。

ですから、別々にやったのであれば、もう少し何日か前に発表することもできたのですけれども、保安院の方はそういう経過で作業をしているのですが、少なくとも、そこまでの御報告上がっていないかもしれませんが、物理的にはもう少し早くできたのではないかという問題意識を持っているということなのですからね。

○海江田元大臣 そうだな、それは、そういうふうに言われてもしようがないね。例えば、僕のところに来たのは、だから10日の夜だな。最終的には21時ごろかな。そういうタイミングだったね。そこから、では、これは早く発表しなければいけないと言って、本当は翌日やるつもりだったけれども、僕だけが勝手にやるわけにはいかないから、官邸と調整していたら、その日が総理に説明の時間がなくなって、翌日の閣議後に時間がとれて、そこで説明したということだな。

【取扱い厳重注意】

○質問者 では、次の質問の方に移らせていただきます。

この質問事項でいうと2ページ目の5になります。いっぱい書いてありますけれども、お聞きしたいことをピンポイントで。

(1)の方の、3月14日に緊急作業時の作業員の被曝線量限度というものを、従来、年間で100mSvだったのですが、この日、250mSvに引き上げる作業を非常に早い時間、短い時間の中でやられているのですが、これは、当初、官邸で上げましょうという話が出て、それで250がいいですねということまでもう官邸で決まって、あとは関係省庁の方におりているといういきさつのようなのですが、その官邸の中でのやりとりについて、もし御記憶ございましたらということなのですけれども。

○海江田元大臣 いや、覚えていないよな。

○質問者 東電が一番、やはり作業をするのにこの100mSvというのはネックになっていたようでして、何とか上げてもらえないだろうかという話をして、それで、幾らぐらいがいいだろうというような話が出てくるらしいのですが、御記憶は、どなたがそんな話をされたとか、だれが線量限度について幾らがいいのではないかとかという話をしていたとか、そういう場面に。

○海江田元大臣 だから、そこはみんな専門家ではないからわからないからね。だから、片一方で100という数字があって、もうこれで動きがとれませんということになれば、当然、では、それを引き上げることも考えなければいけないというのは、その当時、そういう危機的な状況がどんどん進行しているわけだから、それはもういたし方のないことだということで、では、それは働いている人たちの健康が大事だから絶対上げてはだめだなんていうのは、だれも言わなかったはずだよ。だから、ごく常識的な。ただ、何もなかったときに100から200に上げるわけではないわけだから、250に上げるわけではないからね。

○質問者 わかりました。

逆に、その3日後に、また今度は同じ基準をやはり500まで上げようと。どうもこれは放水作業とも関係があったようなのですが、このときのいきさつについて何か御記憶には。

○海江田元大臣 これも、申し訳ないけれども覚えていないね。

○質問者 官邸で、閣議後の話なのかどうか、ちょっとそこら辺は確定できていないのですが、大臣クラスの方が皆さん集まられたその後の打ち合わせの中で、防衛大臣と国家公安委員長が、どうもその引き上げに反対されたという場面があるとも聞いているのですが、そういう御記憶は。

○海江田元大臣 いや、記憶はないね。それは、むしろその当事者から聞いた方がいいのではないの。

○質問者 わかりました。

そうしますと、500mSvに引き上げる関係では、その官邸での場面以外で、あるいは経済産業省に戻られて、大臣室にこういう説明があったとか、こういう決裁をしたとか、こういう指示をしたとか、何か記憶には。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 それは、私が決裁することなの。

○質問者 はい。経済産業省の省令で定めているものがあるものですから、あるいは説明がどこかの場面であったかもしれませんが、非常にもう既に決まっている既定路線としてやっていますので、御記憶も余りないかもしれませんが、ちょっと。

○海江田元大臣 そこは余りないね。

○質問者 はい、わかりました。

それと、ちょっと話が先週お話を伺ったときに戻ってしまうのですが、3月12日の夕方に1号機の炉に水を注入するかしないかと、水といっても海水ですけれども、海水を入れると再臨界する可能性があるのではないかという、その可能性は絶対ないと言えるのかというような、そんなやりとりのあの場面について、後日、こういうペーパーに署名捺印、あるいは印鑑をお願いしますというような話というものは何か。

○海江田元大臣 僕は署名もしていないでしょう、これ。

○質問者 そうですか。わかりました。

○海江田元大臣 何か官邸が、いろいろなことがああでもない、こうでもないということをやっていたのは事実だけれども、僕はそんなことをやることには反対だったからね。だから、こんな署名なんかしていないはずだよ。

○質問者 官邸がどんなときに。

○海江田元大臣 そちらが調べればわかるでしょうけれども、何かつじつま合わせみたいなことをやろうとしたわけじゃないの、いろいろな人が動き回って。だけれども、私はそんなことはやったってしょうがないから。ただ、別に、何かこういう時期だから足を引っ張ることは言わないけれども、何かそんな事実と違うことを言ったって、何か班目さんに全部ひっかぶせようとしたような話なのでしょう。それは、班目さんだって黙っていないだろうから、そんなことはやる必要ないのではないのといっ、僕は別に署名もしていない。その今のも初めて見たね。

それは何、僕は署名なんかしていないでしょう。

○質問者 はい。したものは我々も拝見しておりません。

○海江田元大臣 ねえ。私は、これ見ていないですよ。こんなことやって、ひどいね、これね。

○質問者 大臣の海水注入指示は、時刻がたしか全然違う時間になっていますね。

○海江田元大臣 そうだよ。極めて異例な文書だね、これね。こんなことやったって、どこかでばれるのだから、こんなことやらない方がいいのだよ。

○質問者 何かありますか。

○質問者 全然違う質問でいいでしょうか。

○海江田元大臣 はい。

いろいろな文書があるのだね。

○質問者 済みません、話が前後してしまうのですが、3月20日または21日ごろ

【取扱い厳重注意】

に、日米協議、日本と米国の間の情報交換の関係で、細野補佐官がこのころ日米の合同会議をまとめようと準備されているところですが、そのときに、防衛省の方で別途、日米の自衛隊ですとかの在日米軍が集まって、そのほかに東電や保安院の方も参加されて米国との原子炉に関係する情報交換をされていたと。その話を菅総理が報告されて、お伺いされて、菅総理の方から海江田大臣の方に、今、一体でやろうとしているからちょっとこれはやめてほしいとか、問題ではないか的な話をされたとちょっとお伺いしているのですけれども、そういったことはございましたか。

○海江田元大臣 日米の関係は細野君に全部任せていて、それで、日米でもいろいろなあれがあるのだよな、NRCの流れがあつたりとか、それから、今言った軍隊の、ミリタリーの話があつてということは承知しているのだけれども、東電の中の上の部屋の何階か、5階か何階かを借りたのだね。借りて、そこでやっていたのだね。それで、僕は1回あいさつには行ったけれども、それ以外はほとんど2階にいたから、特にそこがどうなっているのかというような話は余り細かくは聞いていない。

ただ、窒素封入のとき、米軍は何か窒素封入を早くやれということを書いて、それを米軍から直接聞いたわけではないけれども、米軍が窒素封入についていろいろ関心を持っているという話は報告を受けて、それを受けて東電は本当にどうなのだ、窒素封入を早くやれとかね。窒素封入のことはかなり、米軍との議論を受けて、下の方で東京電力とやったという記憶はある。その一本化とかなんとかという話は聞いていない。

○質問者 聞かれてないですか。3月22日から東京電力の5階の方で定期的に議論されるようになったと聞いているのですけれども、そのちょっと前に、どうやら広報を準備している、例の20日、21日ごろに、聞いた話によりますと、防衛省の方でやっているのと細野大臣で事務しているものを分離して、2つやっちゃっている格好になってしまったと。そういった話というのは全く御存じなかったですか。

○海江田元大臣 それは聞いていない。ただ、自衛隊なら自衛隊でやることは、ミリタリー・ツー・ミリタリーでやることは別に何ら問題のない話であつて、菅総理はそういう判断をしたのだろうけれども、私に聞かれば、別にそれはそれでやってもいいのではないのという答えを言ったのではないかなと思つているよ。聞かればね。

○質問者 ありがとうございます。

○海江田元大臣 だって、彼らは彼らなりにいろいろあるのだろう。いろいろな連携の話が。そこを余り、全部こうやれと言つたって、それは無理だわな。

○質問者 若干、ざっくりした話で。今回の事故で、ずっと厳しい対応をされてこられて、まだ事故は勿論終わっていないのであれなのですけれども、振り返って見られて、何でこんな事故になったのだと。勿論、東電の津波対策が不十分というのが一番の根本なのですけれども、そこに至る歴代の政権、原子力政策の問題とかいろいろなことが絡み合っている中で事故だと思つたのですが、そのあたり何か、まさに大臣として経験されたところから、今後の再発防止策というのは我々勿論考えなければならぬ話もあるのですが、その

【取扱い厳重注意】

参考にさせていただきたいと思って、ちょっとお聞きしたいのですが。

○海江田元大臣 一つは、この間ちょっと話したかと思いますが、原災法が適用になっても、結局、いろいろな判断をやるのは事業者なわけですね。それで、その事業者の判断に対して、こういうところをチェックしなさいよ、こうしなさいよといって、そしてその報告が上がってきて、わかりましたと。わかりましたと言わなければならないわけですが、こういう緊急事態が起きたときは、もう少し政府が前に出るような仕組みにやっていた方がいいのかなと思います。ただ、そのときは、やはり、では、やる主体が、それこそ事業者だけではなくて、そういう政府の部隊みたいなものがあればいいなと思いますね。

だから、これは細野君とも話をして、今度の規制庁の中にそういうものをつくるというようなことが项目的には入っているのですけれどもね。ただ、実際それをつくるのはなかなか難しいのだけれども、そういうものがやはり必要で、そういうものを全く考えなかったということはどういうことかという、そういうシビアアクシデントは起きないという前提に立っていたから、やはりそういうことについて手当てができていなかったのですね。だから、シビアアクシデントは起きるということに立てば、当然、そういう今の原災法も違ってくるのではないだろうか。そして、それを具体的に担保できる組織をつくっておかなければいけないのではないかと思いますね。

○質問者 アメリカなどでは、例の9.11のテロの後に、テロによるまさにこういう事象を想定したマニュアルをつくって、日本にも送ってきているようだったのですが、必ずしもきちんと伝わっていなかったと。そういう話にも関連してくると思うのですが。

○海江田元大臣 それから、やはりテロに対する備えも非常に甘いですね。特に、第二原発の施設内に右翼の宣伝カーが入ってしまったのでしょうか。あんなことはあってはいけないことですね。第二原発だって危なかったのだからね。

○質問者 そうですね。はい、わかりました。

○質問者 原子力災害についての意思決定の枠組みといいますか、今回、もともとのマニュアルで想定していた範囲を超えたということもあると思うのですけれども、大きな命題として、やはり現地主体で考えていくのか、それとも、やはり中央でハンドリングしていかなければいけないものもあるのか、役割分担をどうするのか。中央で判断すると、特に自治体の関与とか情報共有・提供をどうするかというところもあると思うのですが、何か御経験を踏まえて、方法、意見なりがありましたらと思ひまして。

○海江田元大臣 やはりこれは、本体と、それからあと中央の方と、それから原災本部との役割の分担があると思うのですね。原災本部は、先ほどもお話ししましたように、住民の避難の話でありますとか、あるいは生活支援の話とか、それはかなり現地でやってもらった、フリーハンドを与えてやってもらった方がいいのではないかと思います。

それ以外の深刻な判断というのは、これはある程度、中央で責任をとらなければいけないわけですから、撤退とか、退避とか、作業員の話とか、あれはやはり中央で判断しない

【取扱い厳重注意】

と、それは現地では判断できませんから、そういう中央が判断する部分も当然あってしかるべきだと思います。

○質問者 中央で判断していく上で、現地の情報なり、そういうものをきちんと把握できるということが一番重要だったと思うのですが、そういう観点での今回の事務局のERCの役割とか、それから保安院の役割とか、中間報告でもいろいろ御指摘させていただきましたけれども、ちょっと不十分だったかなというところがあるのですが、大臣からごらんになっていかがでございましょうか。

○海江田元大臣 それはもう全くそのとおりでありまして、だから、ああいう形で東京電力の本店の中に緊急避難的に統合本部ということで私たちが乗り込んでいきましたけれども、ああいう施設がきちんと、例えば経済産業省なら経済産業省、この保安院なら保安院の中にあって、ああいうオペレーションルームがあって、そこで統一的にやると。現地の状況も入ってきて、情報を共有して、判断が瞬時に伝わっていくと。これはまさに現地の、これは原災本部とも勿論つないで、そこで会議ができて、それで、何か異論があるならそこで提案してもらって、議論して決めるものは決めていくというのがやはりあった方がよかったですね。

それは、東京電力の本店だといろいろ気を使うと言えばおかしいけれども、やはりいろいろそれはありますから。圧倒的にたくさんいるのは東京電力の社員で、最初は随分心細かったよ、それは。そこは、やはり政府の中にあって、向こうに来てもらって。だから、統合本部をつくるということはいいけれども、今回もああいう形でパイヤーもいなかったけれども、それはやはり政府の中にしっかりとしたそういう原子力の対応の本部があって、それが全部、今度は福島だけではなくて、全部の各地の原子力の発電所とつながっているというのが。

○質問者 インフラも含めてですね。

○海江田元大臣 そうそう、インフラをつくれて、それは必要だと思うね

○質問者 うちからも、危機管理センターだけだとなかなかそういう対応が難しいところなので、そうすると、例えばERCとかに事業者も含めて入って、関係省庁も入って、例えば本部長もいてとか。

○海江田元大臣 そうそう。

○質問者 そういったものがあつたら、より適切な対応ができると。

○海江田元大臣 そうすれば、先ほどのSPEEDIの情報なんかは、そこに、ERCとかにすぐ来るわけだから、すると、そっちでやっているときにぱっと来て、これは今来ましたけれどもと目を通せるわけだからね。

○質問者 はい。ありがとうございます。

○質問者 どうも長いことありがとうございました。

○海江田元大臣 どうも済みません、なかなかちょっと、大きな流れは覚えているのだけれども、細かいところになるとなかなかね。

【取扱い厳重注意】

○質問者 これはいただいて、コピーさせていただきます。

○海江田元大臣 いいだろう。少しずつ違っているのだよな。

あれは僕しか持っていないのだよ。だけれども、いろいろな資料があるね。そっちの方がたくさん持っていて、ずっとわかっているのだろう。

○質問者 なかなかああいう厳しい状況で、十分睡眠もとっておられないでしょうし、どこで、いつなんていうのは難しいですね。

○海江田元大臣 会議の様子はずっと自分でとっているのだ。これは会議録だから、いつでも会議録で出せるから。だけれども、東電のあれは全部テレビ電話だから、録画があるのだろう。

○質問者 ありますね。

○海江田元大臣 ないの。

○質問者 最初の部分がないそうですね。

○海江田元大臣 ないのだな。あれを見れば、あれだって、僕は官邸に絶対あると思っていたよ、官邸の総理執務室には録音機がさ。

○質問者 そうですね。

○海江田元大臣 普通はあるわな。映画の「ホワイトハウス」の映画の見過ぎかもしれないけども、デッキなんて。

○質問者 先週は金曜日に福島の、今、中心になってやっている生活安全部長、総務省から行かれている方がいて、2年目の方でして、いろいろ話を聞いてきましたら、何か最近、モニタリングの費用で困っているらしくて。

○海江田元大臣 ああ、福島の。

○質問者 はい。モニタリングを結構お金を出して買ったりしているのですけれども、国から入っている予算というのは、平時に設置する予算というのはついているのだけれども、緊急時に新たに購入した分については予算の枠がないというので。

○海江田元大臣 予備費が幾らでもあるのだろう。

○質問者 何か今いろいろ困っているのですね。だから、ああいうのはもう何か理屈をつけて何とか出してあげればいいのかという話を聞いたのですけれども。

○海江田元大臣 先ほどの回収のあんな紙は、どこから手に入るのだい。

○質問者 それはちょっと。

○海江田元大臣 あれは大したものだね。

○質問者 先週、今週と大体お話をお伺いできて、本当によくわかったという感じなのですけれども。

○海江田元大臣 わかったの。そう。おれの名前が書いてあるのでびっくりしたよ。

○質問者 また補足でお願いすることがあるかもしれませんが、そのときにはまた御連絡させていただきます。

○海江田元大臣 ああ、いいよ。

【取扱い厳重注意】

○質問者 そんな長い時間とらないと思います。

○海江田元大臣 わかった。

○質問者 うちの委員会はこれから、来週、国際会議をやりまして、海外のアドバイザー、アメリカとかフランスとかの専門家の方に来てもらって、中間報告を材料にしまして御意見をいただこうと思っているのです。それで、またその後にヒアリングとかをやって、できれば3月末ぐらいに大体の調査を終えて、それから、そのまとめの作業に入ると。